研究ノート

日出の石匠　吉野覚之丞

辻　満生

昨年の十月二十九日は、日出の石匠吉野覚之丞の百回忌に当り、出身地の日出町藤原西部公民館で、地区の人々を中心として石匠をしのぶ顕彰会が行われた。

吉野覚之丞は近時観光客の急増した宇佐市江須賀の東光寺五百羅漢の彫刻者として有名である。

吉野覚之丞が日出町藤原の出身であると判明したのは、今から十年前、昭和五十一年に日出町が町報を通じて呼かけの結果、子孫にあたる吉野秋三郎(当時五十一歳)が四代目として名乗り出ることにより、其の墓等も判明したのである。

その吉野覚之丞については、昭和五十九年宇佐歴史民俗資料館発刊の「国東半島の石工2」の中に新しく発見された作品が発表されているが、最近の追跡調査により、今迄不明であった没年時の年齢が判明、更に国東半島外の県内作品も二三判明したので、それらを綜合して調査の結果と愚考を述べたい。

先づ覚之丞の墓についてゞあるが、日出町藤原の吉野家裏西側二百メートル程の畑の中、小高い墓地にある。唐破風付の弟子達が建てた師匠墓である。

表面に

石匠宗頭居士

石鏤守節信女

と夫婦の法名を並べ、墓の高さ一・二メートル、

裏面に

豊前宇佐郡中須加ニ而五百漢羅五百二十四躰刻揃居丈二尺八寸也安政六年己午年ヨリ明治十五年壬巳八月十五日済二十四年之間也羅漢寺東光寺道裡和尚之弟子ト成道応ト号ス一宮覚之丞正行支也

（注）右の内、安政六年己午年は己未の誤り、明治十五年壬巳は壬午の誤り、道程和尚は道淋和尚の誤り。

右側面に

明治二十年旧十月二十九日

日出町藤原にある覚之丞師匠墓

酒にむして肴もみすにすてふりて

我行さきハこ空ほう界

左側面に

石方

御園中惣統領

士　一宮覚之丞正行

同人妻　よか

行年

盤の左側面に吉野栄太郎以下五名の弟子名が刻んである。先述した如く墓碑にも享年の刻込がなく、制作年齢・没年齢等推定の域を脱し得なかった。

今年九月末、覚之丞の作品らしい石仏が九重町の龍門の滝の寺院にあると云う情報を得たので早速現地に赴いた。吉祥山龍門寺は有名な龍門の滝のある所にある。黄檗宗の寺院で本堂の奥、滝に向って左側に小庵があり、その室内に八十九躰の背板付石仏が、横五段に安置されている。

庵の外正面に向って左側に石仏制作の由来を刻した碑があり、高さ、一・三メートルの自然石に次の如く刻んである。

石仏本尊八十九躰　一道翁［　　］豊前宇佐郡仲須賀江［

東光寺道林大和尚□之弟子也干時明治十九年戊旧二

一日依り造之始メ□明治二十年亥四月迄ニ□刻揃終［

出生日［　　］一宮正行行年六十一歳

［　　］中須字（トヤ）原又市行年十［

はじめて年齢を記した碑を発見した訳であるが、明治二十年は覚之丞の没した年で、之が最後の作である事も判明した。

竜門寺を訪れた当日、挾間町の竜祥寺に覚之丞の十六羅漢があると云われていたので、二一〇号線沿いにある当寺を訪れた。

竜祥寺は臨済宗建仁寺派の古刹で本尊に向っ左側の一段高い所に十六羅漢が安置されている。

中央に釈迦三尊の石像があり、本尊の台座正面に

日出　一宮覚之丞正行作

右側面に下市村の寄進者二宮恒補外二名の名前を刻み

左側面に

維旹慶応二丙寅歳正月十有五日建立

現翠岱四十二世霊巌代

と刻んである。

日出町木下侯の菩提寺康徳山松屋寺の観音堂前に十六羅漢が安置されているが、之は元国寺の境内秋堂前葉にあったものを、昭和九年二十一世光瑞和尚が観音堂造営に当り、現在地に移転したものである。

この十六羅漢は覚之丞の父の伊八郎の作と云われていた。しかし今回の調査で観音堂の西の庭奥寄りにある釈迦三尊の台座の銘に、横書の「釈尊迦葉阿難　十六羅漢尊」と刻み、縦書に発起人と世話人が刻まれ、左隅に「石工藤原　一宮角之丞　安政元甲寅年十八世　昊天」と刻んであるのを発見した。従って当寺のこの十六羅漢は安政元年吉野覚之丞の銘のある処女作である事が判明した。

今回覚之丞の子孫である養子先の藤原吉野家と、出生地である豊岡曲木の一宮家の両家より戸籍謄本による調査の結果、戸籍名は常三郎、文政十年二月十一日生、嘉永二年十月廿八日同県同村一宮伊八次男入籍す、明治二十年十二月十三日死亡とあり、藤原の師匠墓の月日は旧暦であるので合致することが判り、竜門寺の碑文年齢も六十一歳が戸籍と合致していることが確認された。

覚之丞は文政十年(一八二七)二月十一日豊岡(津嶋村)曲木の石工一宮伊八郎の次男として生れた。豊岡地方の石工は豊富な石山や海運の便を利し、江戸後期の頃より隆盛をきわめ、大別して吉野系・一宮系・今宮系と三系統あり、父の伊八郎は一宮系の惣匠であった。

幼い頃より父の指導をうけ、仏像彫刻に力を注いだ。文化十五年(一八一八)法行堂に建立された二メートル有余の釈迦如来石像(明治二十四年松屋寺に移転)の彫刻には伊八郎が参画したであろうことが推測出来る。

安岐町妙見社にも常夜灯の遺作がある。

覚之丞は嘉永二年(一八四九)二十三歳のとき遠縁の吉野家の養子となり、長女ヨカと結婚。吉野家は農家であったが、生家の石工を本業として身を立て一宮姓を名乗ったようである。吉野家の東下の森にある北山権現の石社の左右に狛犬の石像彫刻

があるが、之は彼の作と云われ、此の頃の作ではあるまいか。

既に述べた日出町松屋寺の釈迦三尊と十六羅漢は彼の二十八歳の作で、銘のある仏像彫刻最初の作と思われる。続いて三年後の安政四年に日出深江住吉神社の灯籠一基を彫刻し、一宮正行作と刻んである。この頃より彼の名が近郷に知れわたり、宇佐江須賀の東光寺住職玉峰道淋和尚の知るところとなったものと推測出来る。

東光寺の五百羅漢記によると、道淋和尚は肥後天草郡小宮地村の生れで、嘉永元年(一八四八)三十五歳のとき東光寺十五世として迎えられ、爾来斯道の興隆に寄与し、九州の霊地並に四国八十八ケ所をくまなく巡拝した。

当時黒船来航内憂外患のうえに、此の地方は干天続きで、農民の苦しむさまを見て、この農民の救さいの道は羅漢の功徳にすがるより外に道は無いと考え、五百羅漢建立の大悲願を立てたのである。

和尚は前述の通り石工にして有名になった日出の石工覚之丞を呼び寄せ、決意の程を打あけたのである。覚之丞は和尚のあふるるが如き慈愛とその熱意に感動し、此の五百羅漢の彫刻完成を誓ったのである。

覚之丞の墓の碑文にある如く、安政六年(一八五九)道淋和尚四十六歳、覚之丞三十三歳から明治十五年迄、二十四年の長きにわたって仏像を刻みつづけ、遂に悲願の五百羅漢の彫刻を完成したのである。

道淋和尚はもとより覚之丞の喜びは言語に絶するものがあった。彫刻の期間中か、完了後か不明であるが、覚之丞は道淋和尚の法弟となり道応と号したと碑文にある。

従来より五百羅漢一すじに一生を終えた様に語られて来たが、最近の調査により発見された在銘の作品から、期間中は計画的に三年置きに仏像や仁王像の受注をして居る事が判明した。

道淋和尚の法弟となった為か、作品のある寺院はすべて禅宗系に限られているようである。熊野の胎蔵寺のみは天台宗であるが、此の仁王像は明治初年の神仏分離の際の移設品である。

道淋和尚は其の後十六年間住職を続けられ、明治三十二年八十五歳のとき故郷の佐世保に帰られ、九十一歳の高齢で入寂さ

れたと云われる。

覚之丞は五百羅漢完成時は五十六歳、其の後は一時健康もすぐれなかったが、明治十九年旧二月玖珠郡九重町の竜門寺の仏像八十九躰の彫刻に取かかり、翌年四月に刻揃終り、その年の旧十月二十九日六十一歳で他界した。

作風について

「国東半島の石工2」に次の様に述べている。

幕末から明治初頭にかけては、津島石工の最も活躍した時期で、とくに一宮正行の活躍はめざましく、宇佐市東光寺五百羅漢をはじめ、万延元年(一八六〇)には国東町の桜本宮に仁王像を、文久三年には豊後高田市熊野の胎蔵寺に同じく仁王像を刻むなどかなりの力作を残している。

彼の手になる仁王像は、国東半島の他のどの仁王像とも異なり、独自の写実的作風を完成している。顔から胸・四肢にいたる筋肉のモデリング、腰裳や天衣の薄肉調の流れるような衣文表現など、かなり手慣れた彫技を示し、刻銘に「石工一宮正行」とせず「一宮正行作」とするあたり、自負心がうかがえよう。

仏像の羅漢は苦行相と云われるが、作品の十六羅漢や、五百羅漢は美・笑・醜・渋の四面相豊かな個性のある表情を一像一像豊に表現してあり、苦心のほどが伺える。

在銘作品一覧表

年号	西暦	場所	神社・寺院	石造彫刻	期間	年齢
安政元年	一八五四	日出町佐尾	松屋寺	十六羅漢		二八
安政四年	一八五七	日出町深江	住吉神社	燈籠		三一

安政六年	一八五九	宇佐市江須賀	東光寺	五百羅漢	着手	三三
万延元年	一八六〇	国東町川原	桜本宮	仁王像	→	三四
文久三年	一八六三	豊後高田市熊野	胎蔵寺	仁王像	24年間	三七
慶応二年	一八六六	挾間町挾間	竜祥寺	十六羅漢	←	四〇
明治十五年	一八八二				完工	五六
明治二十年	一八八七	九重町松木	竜門寺	仏像八十九躰	旧自明治十九年二月 至〃二十年四月	六一

吉野覚之丞の家系

覚兵衛

礼三（八八）＝覚之丞 ― 延平（六二） ― 鎮男（七〇） ― 秋三郎 ― 寛昭

常三郎

正行（六一）

（　）内は享年

石工は覚之丞一代限りで終ったようである。実父の一宮伊八郎の墓（師匠墓）は豊岡の建福寺にある。

東光寺の栞と覚之丞墓の碑文との工期の違いについて

昭和五十四年八月の「国東半島の文化」広報第二号に、「宇佐東光寺の五百羅漢の彫刻者についての考察」として大竹義則氏の論考に、工期が碑文の安政六年から、明治十五年が正しいのではないかとの指摘があったが、現在覚之丞の没年齢や、五百羅漢ほかの在銘作品と年次が解明されたことに依って、碑文の工期が正しいと言わざるを得ない。

栞の如く着手が嘉永三年説とすれば、覚之丞は二十四歳の若年で、到底世人に認められ様な域には達していない。道淋和尚も住職として着任早々に三十七歳の若さで、五百羅漢の大事業に取組めただろうかといさゝか疑問を持つものである。

五百羅漢記は東光寺のものと真珠院の二説あり、前者は嘉永三年着手で二十一年間(月平均二躰)、後者は遅れること十三年後の文久三年着手で八年間(月平均五・五躰)である。真珠院説でも不可能な数字ではないと思われるが、完工時が両説とも明治四年、覚之亟四十五歳時は納得出来ない。

覚之丞の作品は県外の延岡の寺院にもあると聞いたが、その追及は出来ていない。県内に彼の作品がまだあると思われるが、承知の方は御教示いたゞければ幸甚の至りです。(一九八七・一二・一二)

参考文献

五〇〇羅漢記　昭37・10　全日本写真連盟中津支部

五百羅漢記　昭38・6　長洲町教育委員会

国東半島の文化(広報第二号)　昭54・8　国東半島の文化を守る会

国東半島の石工2　昭59・3　宇佐歴史民俗資料館

宇佐再見65(石の文化の旅16)　昭62・11・13　大分合同新聞

会告

※　会費のご納入は、次のいずれかでお願い致します。

(1)　郵便振替口座　下関八―五二九四　大分県地方史研究会あて

(2)　大分銀行県庁内支店・普通預金口座　一六四三二一一　大分県地方史研究会あて